

論文

白鷗女子短大論集
1999, 24(2), 131-144

最初のハイデgger批判

—— マクシミリアン・ベックの書評をめぐって ——

的 場 哲 朗

はじめに —— マクシミリアン・ベックとその書評

哲学者の最初の作品はかならずしも素直に世の中に受け入れられるわけではない。わたしたちはここで、カントの『純粹理性批判』、ヘーゲルの『精神現象学』、ニーチェの『悲劇の誕生』などを思い浮かべれば十分であろうが、この点から言えば、しかし、ハイデggerの『存在と時間』はほとんど例外とも言うべき待遇を公刊直後から受けている。すなわち——、驚くような早さで世間に受け入れられたばかりか、公刊直後からほとんど〈哲学の古典〉ともいうべき取り扱いを受けてきたのである。この著作公刊直後に、これに対する批判書『生の哲学と現象学』を公刊したゲオルク・ミッシュの言葉をかりて言えば、ハイデggerの『存在と時間』は、「厳密な難解な体系的な著作」であるにも関わらず、「異常な哲学的興奮を巻き起こした」ばかりか、「またたく間に受け入れ」①られ、「フッサール年報のかじ取りは一挙にこの〔著作の切り開いた〕新しい方向に旋回させられた」②ということになる。

とはいえ、こうした好意的な評価ばかりではない③。これとはまったく違う、ハイデggerに対する否定的な評価もまた存在しているのである。本稿では、1928年に公刊されたマクシミリアン・ベックの書評「マルティン・ハイデggerの『存在と時間』の書評と批判」(Referat Kritik von Martin Heidegger: <Sein und Zeit>, 1928/29) ④——この書評は、ハイデgger研究者であればおそらくどこかで目にしたことがあるのではないだろうか——

を挙げてみたい。ベックはこの書評においてハイデッガーの『存在と時間』を厳しい口調で批判するのである。まずは、その厳しい批判に耳を傾けてみることにしよう。

「ハイデッガーの〔公刊した〕著作は、アリストテレス以来行き詰まってしまった暗礁を乗り越えて、存在問題を哲学の根本問題として提出するという要求を掲げて登場する。したがってこの著作は、二千年を超える古い哲学的伝統の完全な転換 (die völlige Umwälzung) であることを要求するのである。ところが実際のところは、今日生きているすべての哲学諸派の総合であるにすぎない。——つまり、革命的な始原とは直接的には反対のもの、つまり、所与の諸前提を首尾一貫して最後まで思惟すること以外のものではないのである。」(S. 5、傍点は訳者)

ハイデッガーは、二千年を越える西欧哲学の伝統の「完全な転換」を目指すが、しかしじつは、まったく逆のこと、つまりこれまでの「哲学諸派の総合」をおこなっただけにすぎない、と言うのである。この批判がただしいか否か、これについては即答は避けるとして、ここではなによりもベックのこの書評そのものに耳を傾けてみることにしたい。

1. マクシミリアン・ベックとかれの現象学の立場

まずは、この書評の著者マクシミリアン・ベック (Maximilian Beck, 1887-1950) についてひとこと述べておくことにしよう。

ベックは、スピーゲルバーク (1904-90) らとならぶ、アレクサンダー・プフェンダー (1870-1941) の弟子であり、したがってミュンヘン現象学派のひとりである。

簡単に履歴を紹介すれば、かれは1887年2月14日にチェコスロバキアのピルゼンに生まれ、1950年4月21日にアメリカのリトル・ロックで死去。1915年にミュンヘン大学のプフェンダーのもとで学位を取得。1933年プラハに移住し、34年から38年までマサリク市民大学 (Masaryk-Volkshochschule) 講師を経て、1938年にアメリカに移住。40年から44年までエール大学の研究員

をつとめたあと、アメリカ各地の大学で講師をつとめている⑤。

著作としてはかれは1925年に『本質と価値——現存在の哲学の基礎付け』二巻 (*Wesen und Wert. Grundlegung einer Philosophie des Daseins*, Berlin, 1925, 2.Bde.)、1938年に『心理学』(*Psychologie*) と『哲学と政治』(*Philosophie und Politik*) を公刊。論文としては、1928年に「認識論の最近の問題状況」(*Die neue Problemlage der Erkenntnistheorie*, in: *Deutschen Vierteljahrsschrift für Geistesgeschichte und Literaturwissenschaften*, 6., S.611-639) がある。ベックは、本書評を収載する雑誌「哲学雑誌」(*Philosophische Heft*, 1928-36) の編集者であり、この書評のほかこの雑誌にかれは「現在の倫理学的な根本原則との批判的対決」(*Kritische Auseinandersetzung mit den ethischen Grundprinzipien der Gegenwart (mit besonderer Berücksichtigung der Lehren von Dilthey und Nikolai Hartmann)*)、「理念的実存」(*Ideeale Existenz*)、「理念的実存 (承前と結論)」(*Ideeale Existenz (Fortsetzung und Schluss)*)、「倫理学」(*Ethik*) を寄稿している。かれの編集したこの雑誌に寄稿されためぼしい論文を挙げれば、ヘルバルト・マルクーゼの「史的唯物論の現象学寄稿」がある。

ところで、マクシミリアン・ベックの哲学がどんなものであったかについては、残念ながら、かれの著作や論文などを見ていないので不明であるが、最近公刊された『エドムント・フッサール往復書簡』⑥(以下、引用に当たってはHB.と略す)を手掛かりにしてかれの哲学の方向だけは見定めて置くことにしたい。この書簡集には、かれとフッサールとの間に交換された、1922年9月25日から31年11月1日までの往復書簡8編が収載されている。

まずは、このハイデッガー書評に対するフッサールの言葉を引くことにしよう。1928年10月28日付の書簡の中でフッサールは、「親切にも、二冊の哲学雑誌を送っていただきほんとうに感謝しております。そのうち[ハイデッガーの書評が掲載されている]第1号は興味を持って(mit Interesse)読ませていただきました」(HB.9f.)と簡単に述べている。あまりに素っ気なく、なにか冷たいものさえ感じられるが、ともあれ、これ以上の記述はない。

バックとの往復書簡はまず最初、フッサールに送られたかれの著書『本質と価値』の原稿——その序論となる第一巻は「1918年にミュンヘン」(HB.7)で執筆されたらしいが——に対するフッサールのお礼の手紙からはじまっている。

全体を通して言えることは、バックはフッサールに対して、「わたしは、わたしたちすべての師であるあなたの著作の意味が、厳密な哲学の破壊不能な基礎を、つまりは、来るべき諸世代の伝統と、研究の進展とを担いうる基礎をハッキリと仕上げることにあると見ています」(HB.9)と述べながらも、「わたしの師プフェンダー教授」(HB.9)の現象学の立場を貫き通しているのに対して、フッサールの文面は冷たく、むしろきわめて批判的な冷淡な文言で満ちている。

たとえば、1927年6月16日のフッサール宛て書簡の中でバックは、「わたしの研究・・・によって、いかなる状況に置いててもはやこれ以上その解明が引き延ばせない問題について議論を提出した」(HB.9)と誇らかに語っている。その研究とは、「哲学雑誌」の第二巻(1929年)に寄稿された論文「理念的実存」——もともと、「イデー論のあたらしい基礎付けの試み」(HB.9)というタイトルであつたらしい——であるが、しかしこうした、ミュンヘン現象学派のプフェンダー的な本質主義的現象学は当然、超越論的現象学を提唱するフッサールの機嫌を損ねるだろうことは容易に想像がつく。

「残念ながら、あなたにはわたしの現象学的な観念論のほんとうの意味、つまり現象学的還元の意味がお分かりになっていない」(HB.10)と、1928年10月28日の書簡でフッサールは不満を述べるが、1931年の最終書簡ではもっと語調を強くして、「わたしは総じて、あなたがほんとうにわたしの超越論的観念論的な哲学の意味がおわかりにならないことが残念で仕方ありません。ですから、わたしであれだれであれ、あなたのご批判を役立てることができません。あなたの批判された哲学がまったくわたしのものでないとするれば、あなたのすべての素晴らしい洞察はいったい何の役に立つのでしょうか」(HB.12)とぶちまけている。

ベックの志向性理解もフッサールを「驚かせる」(HB.10)。

哲学雑誌第3号の巻頭論文オスカー・クラウスの論文「ブレンターノの認識論と価値論におけるコペルニクスの転回」(S.133-142)にベックが「編者の注」をつけ、つぎのように述べたのである。すなわち、ブレンターノの場合、志向性は心的な内実存であるが、フッサールの志向性の概念ではこれは意識の自己超越としてラディカルに否定された。「まさにこの否定のおかげでフッサールの志向性概念はその画期的な意義をもった。——ところが、スコラ哲学の〈志向〉という術語の意義の基礎には、このフッサールによって否定された理論がある」(HB.10)と。これに対してフッサールは、「あなたの注はわたしを驚かせました。わたしは、あなたがほんとうに〔わたしの志向性を〕正しく理解しているのかどうかわからなくなりました。わたし自身は志向性の発見を要求したことはけっしてないし、ブレンターノに——スコラ哲学ではありません——発見〔の功績〕を帰してきています。ブレンターノに帰したのは、かれが——これがまさしく画期的な転回となるのですが——内在的な客観への関係^{ブスインシュ}を心的な諸現象の記述的な根性格としての心理学〔敢えてプフェンダー的な色彩を出して！〕へと導入したからです。わたしはもっぱらこれを拠り所にしていますし、わたしはもちろん、わたしの諸研究によってはじめて志向性のほんとうの意味、ないし、これを心理学的哲学的に取り扱う方法があきらかになり、したがってブレンターノの発見が実り豊かなものになったと確信しております。ひょっとすると真実はこの中間にあるのかもしれませんが、しかしわたしとしてはわたしの師ブレンターノにあまりに多くのものを負っています。かれとかれの刺激がなければ、わたしは今あるような思想はもてなかったことでしょう。」(HB.10-11)

「わたしたちの師」とフッサールに近づくベック。その言葉とは裏腹に、ミュンヘン現象学をしっかりと堅持するベック。これに対して、終始不満をぶつけるフッサール。——公刊された書簡からわたしたちはこうした両者の〈対立〉をかぎ取ることができるが、ここにはしっかり、「具体的な体験の本質分析」を目指して、「認識論的反省よりも事象そのものへ」と向かうミュ

ンヘン現象学と、『イデー』以降、超越論的現象学への道を歩みはじめたフッサールの現象学とのおおきな〈溝〉が覗いてくる。言うまでもなく、この書評においても重要なのはこの両者の〈溝〉である。

ここであらためてマクシミリアン・ベックの書評に話を戻したい。

残念ながら、ベックがハイデッガーの『存在と時間』の書評を引き受け

ることになった事情については不明であるが、しかし総ページ数39ページあまりと、書評としては大部のものであり、内容的にも——別表の「論文の目次」(図1)を見ればわかるように——精緻なもので、形式面から言っても、けっして安易な批判でないことはあらかじめ断っておきたい。

図1. Mベックの書評の目次

- | |
|---------------------------------|
| 1 節、外的な特徴付け |
| 2 節、諸前提 |
| 3 節、体系の着手 |
| 4 節、人間的現存在の「世界」と「世界内存在」 |
| 5 節、批判 |
| 6 節、人間的現存在の実存の本来的な「意味」としての「時間性」 |
| 7 節、人間的現存在の実存的存在としてのゾルゲ |
| 8 節、非本来的実存に対する本来的実存の関係 |
| 9 節、批判〔本文では「第9節」の文字はない〕 |

2. ベックのハイデッガー理解

a. ベックの批判と方法

もう一度ベックの言葉を引くことにしよう。

「ハイデッガーの〔公刊した〕著作は、アリストテレス以来行き詰まってしまった暗礁を乗り越えて、存在問題を哲学の根本問題として提出するという要求を掲げて登場する。したがってこの著作は、二千年を超える古い哲学的伝統の完全な転換 (die völlige Umwälzung) であることを要求するのである。ところが実際のところは、今日生きているすべての哲学諸派の総合であるにすぎない。——つまり、革命的な始原とは直接的には反対のもの、つまり、所与の諸前提を首尾一貫して最後まで思惟すること以外のものではないのである。」(S. 5)

ハイデッガーは「古い哲学的伝統の完全な転換」を目指したが、しかし「すべての哲学諸派の総合」にとどまった、と言うのである。

ベックはしかし、「かれの著作のきわめて哲学的な価値」(S.4)を否定するのでも、また「この著作独自の価値」(S.6)を否定するのでもない。むしろかれとしては、「どこかで、この難解な著作の可能なかぎり適切な理解に向かう始まりがなされなければならない」以上は、こうした「大胆な試みは……必要である」(S.6)というかれなりの確信から叙述をはじめているのである。かれは言う。

ハイデッガーの「この哲学の書評と議論は困難であるが、これはしかし、この哲学が定義から定義へと一步一步と高まっていくのではなく、ほかのすべての定義をあらかじめ理解していなければ、適切に定義を理解することができないということで一層高められる。しかも、ハイデッガーの哲学はこれまで半分しかまだ展開されて公刊されていないのである。こうした状況である以上、書評の試みはどれもたしかに大胆な試みとなる。他方から言えば、書評の試みは——まさにそれゆえに——必要なのである。じっさいどこかで、この難解な書物をできるだけ適切に理解することに向かうような着手が何としてもなされなければならないからである。すでに与えられた諸定義の前理解に到達しようという、注意を集中する試みなしには、いまだない諸定義の理解も考えられないのである。」(S.6)

ベックは、「ハイデッガーの思想の歩みへのもっともわかりやすい導入」として「かれの諸前提から出発すること」を方法として堅持する。諸前提を指摘しながら、そこに「批判的糸口」を見い出すのである。もちろん、ベックと言えども「ハイデッガー哲学がこれに先行する諸哲学に根を持つことを証明したからといって、かれの哲学独自の価値はまったく減少しない」ことは十分に承知している。かれにとって問題はむしろ、ハイデッガーに先行する哲学の持つ〈誤謬〉なのである。もっと具体的に言えば、「古い哲学的伝統の完全な転換」を目指すことは、「ハイデッガーの著作の価値を下げるどころか、逆に、この著作のきわめて哲学的な価値を特徴づけている。しかし、これによってこの著作の著者の革命的な要求が問題をはらむものとなる」(S.5)と言うのである。ベックは、ハイデッガーを全面的に否定するので

はなくて、ハイデッガーの要求する課題を全面的に展開するにはいったい何が問題なのかをハイデッガーに向かって敢えて突きつけようと言うのである。

こうしてベックは、「ハイデッガーの諸前提」として、ベルグソン、キルケゴール、ニーチェ、マルクス、フッサール、ディルタイという五つの「前提」を摘出する。言うまでもなく、こうした「諸前提」は今日のわたしたちからすればすでに教科書的な知識に属している、と言えよう。ここでとくに興味深いのはフッサールとマルクスである。

b. マルクスの「前提」

ベックは、ハイデッガーのマルクス的な「前提」としてふたつのものを指摘する。

まずひとつは、「マルクスとハイデッガーは、〈人間〉が何よりも、そして大抵は個人的な個的な主観として実存するのではなくて、社会として実存する。社会（マルクスにおいては〈階級〉、ハイデッガーにおいては〈世人〉と〈共存在〉）……。わたしは、わたしが社会的に実存する以前に、またそれによって自我であるのではない。むしろ、自我そのものではなしに〈わたし〉は社会的に実存しうるのである」（S. 9）。世人と共存在から出発して人間を叙述するハイデッガーの分析姿勢にマルクスの人間論と共通するものがあると、ベックは言うのである。

ふたつ目は、「硬直した事物直前存在性の意味でのあらゆる実体性に対するハイデッガーの攻撃はマルクス的である。それは、弁証法のプロセスの物象化に対するマルクスの攻撃に対応する」（S. 9）と述べている。周知のように、ゴルトマンはハイデッガーの『存在と時間』がゲオルク・ルカッチの『歴史と階級意識』を意識して書かれた、と述べている⑦が、その指摘の原型がここに見られると言えよう。

もちろん、マルクスも含め、ベルグソン、キルケゴール、ニーチェ、ディルタイといった「諸前提」はベックにとって大した問題ではない。かれにしても、「突然、無媒介に無からまったく新しいものに向かって飛び出ていく

諸努力が有意味であるなど素人の考えである」(S.6)ことは十分に承知している。もっとも大切なのは、言うまでもなく、フッサールという「前提」である。

c. フッサールの「前提」

先ほど、ベックとフッサールと間に大きな〈溝〉があることに触れたが、ハイデッガーにおいてもこの両者の〈溝〉が指摘される。ベックの批判は、ミュンヘン現象学からするハイデッガー批判なのである。いやもっと正確に言えば、フッサールの『イデー』を継承するハイデッガーに対する批判なのである。

具体的に見てみよう。

フッサールは、「現象学の研究領域として、〈超越論的に純化された意識〉を説明する」(S.10)。この意識は、この意識の彼岸としての世界と自我の措定を排除するのである。こうして、「現象学を試みようとする」と、わたしたちは自然的な超越的な存在措定をしてはならず、かくしてその措定に暴力的に逆らって、この措定そのものを意識に内在するものとして研究の地平の中に獲得するのである」。これに対してハイデッガーは、「〈存在〉＝〈所与のもの〉ないし〈直前存在〉の意味を徹底的に自明なものだと説明しない点で、フッサールを越えている。」しかし、「フッサールの〈超越論的に純化された意識〉にもハイデッガーの〈現存在〉にも世界主観と世界客観という〈所与性〉が帰属していない。自我と世界はむしろ、〈意識〉ないし〈現存在〉の特別な在り方としてはじめて構成されるのである。」ベックは続ける、「フッサールとハイデッガーにとって……現象学は、それが当初に思惟されたものとはまったく逆のものになった。当初は、すべての構成に反対して！というのが現象学の合言葉だったのである。すなわち、端的に〈与えられたもの〉を可能ながざり信頼して明示し記述することに戻ろう、と。今や現象学は〈与えられたもの〉に暴力的に反対してみずから構成するのである。フッサールにとって〈世界〉という超越論的な対象は、つねにみずからを超越する

〈志向性〉の意味連関の中で〈構成〉される。ハイデッガーにとっては、〈世界〉は常なる有意義性連関として構成されるのである。」(S.11)

フッサールもハイデッガーも、モナド的な意識ないし現存在から出発して世界の構成を説く。バックとしては、両者の超越論的な現象学という立場を批判したいのである。それゆえ、つぎのように結論する。すなわち、「すべての点でフッサールはハイデッガーのうちに〔じぶんの『イデー』を〕首尾一貫して最後まで思惟する者を認めただけではなく、かれの哲学の決定的な前提をもハイデッガーに伝えたのである。」(S.13)

言うまでもなく、本質主義を堅持して超越論的現象学を拒否するミュンヘン現象学の立場からすれば、こうした批判は当然出てくることであろう。「ハイデッガーには〈現象〉や〈現出〉というもっとも根源的な、もっとも本来的な概念が欠落している。このふたつが透明なのである。」(S.27)

かれはハイデッガーについて結論的につぎのように述べている。

ハイデッガーにおいて、「わたしたちが現実に生きている世界の諸分析は豊かで正しい……。間違っているのは、この現象学的明示の理論的な前提と結論なのである。すなわち、昔から〈認識〉と〈存在〉の自然的な意味として見なされているものがただ、人間の実践的情緒的完全存在の〈派生的な様態〉にすぎないかのようにすることである。」(S.26)、と。

3. バックの『存在と時間』理解

ところで、バックの『存在と時間』理解を見てみたい。

バックは、「この書評の試みはハイデッガー哲学の理解にはなにも寄与しないかも知れない」(S.38)と謙遜するが、かれの『存在と時間』理解は基本的には正確であると思われる。

「ハイデッガーの基本的な確信はつぎのものである。すなわち、世界についての理論的な知覚がはじめてわたしたちの、特定の仕方に関心をもたれた(とりわけ実践的な)世界に対する態度を可能にするのではなくて、逆に、すべての理論的な意識は——このような意識に世界はおのずから与えられた

ものとして、すでに直前的なものとして出会ってくるのであるが——すでに、日常の用事を気遣う世界内存在のなかに基礎を持っており、この〈直前的な〉世界はなによりもこの世界内存在のおかげで構成されるのである。世界は第一次的には……^{レーヘンディヒカイト}生性^のなかで構成され、この生性がぬぐい去られることによってはじめて世界は〈直前的な〉世界として出会ってくるのである」(S.22)。

この「ハイデッガーの基本的な確信」にしたがって、ベックは『存在と時間』の内容を紹介する。まず、「4 節、人間の現存在の〈世界〉と〈世界内存在〉」ではハイデッガーの世界分析を(1)対象、(2)これを認識するものの誰か、(3)この誰かの存在の仕方、(4)手元存在・直前存在、(5)人間、(6)空間と、ほぼ『存在と時間』の叙述の順序にしたがって叙述していく。

時間性については、「これまで公刊された部分におけるハイデッガーの著作の問題は人間の現存在の存在である。人間は直前にあるのではなくて、人間は〈実存する〉。この実存することの意味と見なされるのが可能存在であり、存在可能を純粋なデユナミスとして分析することが大切である。ハイデッガーは……ディルタイとベルグソン以来特別な切迫性をもつ問題の前に立たされるのである」(S.30)と述べて、「第6 節、人間的現存在の実存の本来的〈存在〉としての〈時間性〉」において時間性を説明する。さらに、「第7 節、人間的現存在の実存的存在としてのゾルゲ」、「第8 節、本来の実存と非本来の実存の関係」と進んでいく。

ベックは、こうしたハイデッガーの分析の鋭さは評価するが、しかしこうした分析の背後にある「前提」、すなわちフッサールの超越論的な観念論については批判するのである。ベックとしては、事象そのものを忘れて、こうした人間の意識の構成に固執するフッサールの観念論、哲学に不満が爆発するのである。

それゆえ、ハイデッガーについてつぎのように述べる。「かれの哲学的思惟には、かれが哲学しはじめる以前にあらかじめ道が示されている。すなわち、存在の〈意味〉のすべての認識の鍵と始まりと終りは人間であり、この

人間にとってはすべての、非人間的な存在は平均的な日常性の中で——ただ人間的現存在をめぐって——ただ〈手元的な道具〉（たとえば〈仕事の道具〉）としてしか出会ってこない。近代的な、世界荒廃的な、帝国主義的な人間の古代妄想をよりラディカルに描き出してみることはまったくありえない。この姿勢こそ、ハイデggerの人間学的存在形而上学一般が可能となる、ほんとうに究極的な根拠である。」(S.22)

4. 超越論的現象学批判としてのハイデgger批判

すでに述べたように、ベックはミュンヘンのプフェンダーの弟子である。そこから、フッサールとの間で交換された書簡にも〈大きな溝〉があった。フッサールはそれをはっきりと、「残念ながら、あなたにはわたしの現象学的な観念論のほんとうの意味、つまり現象学的還元の意味がお分かりになっていない」と非難している。ハイデgger書評についてもかれは、「そのうちの第1号は興味を持って（mit Interesse）読ませていただきました」と手短に論評するが、フッサールとしてはハイデggerとひとくくりに、「すべての点でフッサールはハイデggerのうちに〔じぶんの『イデー』を〕首尾一貫して最後まで思惟する者を認めただけではなく、かれの哲学の決定的な前提をもハイデggerに伝えたのである」と論評されたことに大きな不満をもったことはまちがいない。

ベックのハイデgger批判も、基本的にはこのフッサール批判と同一の方向で一貫する。すなわち、「フッサールとハイデggerにとって・・・現象学は、それが当初に思惟されたものとはまったく逆のものになった。当初は、すべての構成に反対して！というのが現象学の合言葉だったのである。すなわち、端的に与えられたものを可能なかぎり信頼して明示し記述することに戻ろう、と。」ところが、ハイデggerは現存在の分析論に集中して、世界の構成を主張しはじめた。その結果が、「近代的な、世界荒廃的な、帝国主義的な人間の古代妄想をよりラディカルに描き出してみることはまったくありえない」ことになる。これがベックの批判である。

あらためて、かれのハイデッガー批判を思いだしてみよう。

「ハイデッガーの〔公刊した〕著作は、アリストテレス以来行き詰まってしまった暗礁を乗り越えて、存在問題を哲学の根本問題として提出するという要求を掲げて登場する。したがってこの著作は、二千年を超える古い哲学的伝統の完全な転換であることを要求するのである。ところが実際のところは、今日生きているすべての哲学諸派の総合であるにすぎない。——つまり、革命的な始原とは直接的には反対のもの、つまり、所与の諸前提を首尾一貫して最後まで思惟すること以外のものではないのである。」

ベックもハイデッガーの「完全な転換」には諸手を上げて賛成する。それは当然、かれの信ずる「本質現象学」であるべきなのである。ところが、ハイデッガーはフッサールの奉じる、超越論的な現象学という構成主義、観念論に立ち戻ってしまった。これがベックの批判の要点である。

〔本論文は、1999年9月26日（日曜日）に開催された「第50回、ハイデッガー研究会」（法政大学）において口頭発表した原稿に一部手を加えたものである。本論は、成蹊大学教授三浦國泰氏の献身的な努力に多くを負っている。氏は、ヴィーン大学留学中の多忙な中、M. Beckの書評を捜し出され、著者に送ってくださったのである。ここに感謝の言葉をあらわしたい。〕

注釈

- ①、Georg Misch, *Lebensphilosophie und Phänomenologie. Eine Auseinandersetzung der Diltheyschen Richtung mit Heidegger und Husserl*, Damstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1930,1975.,S.1.
- ②、ibid.,S.2.
- ③、ここでは、Hedwig Conrad-Martiusのハイデッガー書評を挙げたい。
この書評についてはあらためて後日紹介することにしたい。
- ④、Maximilian Beck, Referat Kritik von Martin Heidegger: <Sein und Zeit>, (in: Philosophische Hefte, Bd.1, Herausgegeben von Maximilian

Beck, Berlin, 1928/29)

- ⑤、Hsg. v. Hans Rainer Sepp, *Edmund Husserl und die Phänomenologische Bewegung. Zeugnisse in Text und Bild*, Karl Alber, Freiburg/München, 1988, S.423f.
- ⑥、Edmund Husserl, *Briefwechsel, Band II, Die Münchener Phänomenologen*, Kluwer Academic Publishers, 1994.
- ⑦、リュシアン・ゴルドマンは、『カントにおける人間・共同体・世界——弁証法の歴史の研究』（三島淑臣・伊藤平八郎訳、木鐸社、東京、1977）の中で、「ハイデggerの『存在と時間』…は、それが大部分——おそらく著者には全然自覚されないまま——ラスクおよび主要にはルカーチの書物『歴史と階級意識』との対決であるということを顧慮するときのみ初めて理解可能となる。」(22頁)と述べている。さらに、この点で「付録」(291－298頁)も興味深い。